日本・韓国のアイデンティティ形成における「集団性」の相違

奇　　恵　英

Differences between Japanese and Korean Identity Formation of the Role of Collectivity

Hyeyoung Ki

はじめに

Erikson, E.H.(1950) によって概念化され、一般的に使われるようになった「アイデンティティ」とは“「自分は他者と違って自分である」という斉一性の感覚（self-sameness)、および「自己はこれまでいかにして自分となってきたのか」という一貫性の感覚（continuity)”である（鑪、2002)。この感覚によって、“「・・・としての複数の自分」を統合する「根元的な自我」”（小此木、1981）が成り立ち、かつ維持され、私が私であるという主体的な存在証明とともに実感がもたされるのである。

しかし、現代の日本は、戦後の制度解体や急激な変化を導いた経済成長などにより、従来の社会規範が失われると同時に価値観の多様化が起こることによって、“不確実性の時代”（森、1989）になってきた。そのような時代・社会の変化・あり様によって個人は、それまで確かだった規範や常識を失う一方、物質的豊かさの代わりに現実的検討能力を失った個人の肥大した万能感が生み出されるようになる。

このように、現実感と非現実感のはざまで、「理想の自分」や「本当の自分」を探し求め、社会的な存在としての自己形成あるいはアイデンティティの獲得に失敗する“青い鳥症候群”（清水、1983）が浮上するようになった。よって、「自分は何者か」という普遍的かつ本質的な問いへの探求は、現代日本において、社会病理および精神病理の理解という課題を含め、より深刻な問題となっているように思われる。

従来、日本におけるアイデンティティの論議は主に西欧との対比によってなされてきた。その理由としては、アイデンティティの概念が西欧から由来したことに加え、自己の確立とは、心理・社会的意味をもち、関係性に基づくことから、異質な他者、あるいは他集団との相対化によって自己を明確化することが可能であるためと推測される。その異質な対象として西欧がもつ価値観および自己のあり方が取り上げられ、他者とは切り離された個人の独自性や集団あるいは関係から分離した自立性の確立が強調されてきたように思える。

しかし、このような傾向には、戦後の西欧志向主義が大きく影響していることは否めないであろう。「個」の自己確立とは歴史を背景に、それまでに形成されてきた社会・文化的価値観という根元的な基盤の上に成り立つ。このような基盤さえ崩壊したのちの「個」の再創造および確立は考えにくい。このことから、西欧の社会・文化的価値観をそのまま取り入れた「個」あるいは「自己」の確立とは、新たな自己像のモデルを提示する反面、自分の原型を失う矛盾をもたらすこともあり得るのではないだろうか。

このような視点から、歴史的に同じ源流を持ちながら、近代において共通の歴史的体験をし、西欧に追いつくための経済成長を目指すという一致した方向性に向かってきた韓国との対比は意味あるものと思われる。なぜなら、このような共通の背景、基盤をもちながらも、両者それぞれの違いが明らかであるところにこそ、各々の拠り所とする原型や独自性が浮き彫りになると思われるからである。

よって、本稿では、日本と韓国のアイデンティティ形成における相違を明らかにし、その特徴を検討することを目的とする。その際、「集団性」に注目するのは、心理・社会的概念としてのアイデンティティにおいて「集団」との関係は必然的に考慮されるべきであること、さらに、西欧と東洋の対比において、西欧の個人主義と東洋の集団主義、あるいは西欧の個人志向性と東洋の集団志向性が一般的に取り上げられるため、西欧の視点から東洋に共通するものとして扱われる「集団性」を、日本と韓国の対比の視点から捉え直す必要があると思われるからである。

Ⅰ．西欧的アイデンティティ観の批判的再検討

従来、欧米においては、他者から切り離された「個」としての自己の側面が優勢なのに対して、日本においては他者と「関係」の中での自己の側面が優勢である（土居、1971；南、1983）と論じられてきた。一般的に「アイデンティティの確立」は「自己の確立」、あるいは「自我の確立」といわれるが、ここでいう「自己」、「自我」は“セルフ＝「個としての自己」”につながる意味をもち、よって、アイデンティティは「個の確立」、あるいは、他人と区別され、集団の中で明確な境界をもつ個人

の独自性の獲得として捉えられがちである。

しかし、個人の独自性という、その人固有の内的世界は、個を取り巻く外界、すなわち、社会や他者との相対性、関係性との力動の中で明確化される。そもそもエリクソン（1973）のいう「心理・社会的アイデンティティ」とはこのように社会との相対性、関係性から個人をみる視点を提示したものである。

すなわち、「心理・社会的アイデンティティ」とは「個人の内なるアイデンティティ」と「共同体に属する者としてのアイデンティティ」の二つの次元から考えることができる。前者が主観的、個人的世界である反面、後者は客観的、社会的世界であり、「この両方をつなぎ止めるその人の主体的で能動的な感覚や実感こそが、その人のアイデンティティとして獲得されるもの」（西平、1993）である。したがって、いわゆる「個人的世界」と「社会的世界」は相対的でありながら有機な関係にあるといえる。

梶田（1998）は同じ視点から、1）原初的アイデンティティ（周囲から一貫した扱い）、2）社会的アイデンティティ（役割・立場の意識と遂行→「位置づけのアイデンティティ」）、3）主体的アイデンティティ（実感、納得、本音が伴った役割・立場の意識と遂行→「宣言のアイデンティティ」）といった、「アイデンティティ形成の3段階」を提示した。そこで社会的アイデンティティの段階である「位置づけのアイデンティティ」から脱却し、自分で自分にどういう意味づけを与えるかという主体的アイデンティティの段階である「宣言のアイデンティティ」を確立することを強調している。

すなわち、「宣言のアイデンティティ」とは、個人が自分の内的世界である「私の世界」（原初的）と相乗関係をもつ「私たちの世界」（社会的）の融合を主体的に行い、自分の実感と納得のもとで、「私は他ならぬ私である」（主体的）と宣言するということである。この相乗関係から考えると、アイデンティティの確立とは、個か集団か、あるいはどっちが優勢かではないし、勿論、両者の区別がなくなった拡散の状態でもなくて、両方を包括した上でさらに独自なまとまりをもった全体としての統合といえる。

しかし、個の確立における社会・他者などの集団との主体的な統合は、西洋と東洋を比較するとき、個を重視する西洋と集団を重視する東洋に分離・対置されて、しばしば「個の確立」とは「集団への同調・同和」と相反するものとして捉えられ、自立や自己の確立において、集団から切り離された独立した個の存在を「独自性」、「主体性」として美化することが多いように思われる。

それに対して北山（1995）は、ある文化において歴史的に共有されてきている自己についての暗黙的前提を意味する「文化的自己観」を提示している。「文化的自己観」は、「相互独立的自己観」と「相互協力的自己観」からなり、前者は他者から分離・独立し、独自性を主張することが必要とされる欧米文化において前提とされる自己観であるに対して、後者は相互協調関係の維持を重視し、他者との関係が自己を定義するような日本をはじめとするアジア文化で前提とされる自己観を意味することを示唆した。さらに、浜口（1977、1982）は、人間存在の捉え方において、西欧と東洋の根本的な相違について論じ、自立的主体として他者から独立した個人という考え方を基礎とする西欧の発想に対して、東洋の人間観では、他者との関係の中で初めて自分というものを意識し、他者との間柄を自分の一部であると考えるとし、そのような人間観、自己観を「間人主義」と呼んだ。

このように、東洋では個人と社会・他者との関係性が強く強調され、集団性の問題を抱えるといった共通性をもつと同時に、そのような「集団性」の基盤においてこそ、個人と社会の融合が主体的に行われ、自分の実感のもとで「私は他ならぬ私である」と宣言が可能であるといえよう。したがって、東洋における個人の「アイデンティティの形成」過程を理解する際、東洋の文化的自己観にもとづいた「集団性」の理解が求められ、その性質は西欧と区別されると同時に、自ずと「アイデンティティ形成」過程に対する捉え方も変化されるのではないかと思われる。一方、東洋圏で括られながらも、各々の国がもつ歴史、社会・文化的な背景の違いを考えると、共通性を持ちながらも、その性質においては違う志向性と構造がありうる。

Ⅱ．日本のアイデンティティ形成における特質

「相互協調的自己観」を重視し、他者との関係が自己を定義するような文化社会的特徴をもつ日本においては、アイデンティティ形成過程で、“周囲との調和が何より重んじられる「集団」や「場」の中にあって、独自の「個」を確立しようとするときに直面する、主観的体験としての「個」か「集団」かの2者択一的葛藤”（三好、2001）が体験される。これはあたかも、集団から脱皮して個の確立を目指すか、集団に同調し、その一員としてのみ込まれるかという2択の問題であるかのように見える。

鑪（同上）は“アイデンティティの混乱は・・・親しい、信頼する人の中に自己を投入し、自己を没する行為の中で、逆に自己を回復し、より大きく獲得していく過程”に体験されるべきものであるとした。すなわち、重要な他者との同一化とその関係性の捉え直しによる再統合といった“対人関係の相互性”（鑪、同上）はアイデンティティの確立において必然的なものである。

しかし、他者との同一化は他者に呑みこまれ、他者と一体化するのではないかという恐怖を同時にもたらす。鑪（同上）がまとめたように、“「呑みこまれ」の恐怖には・・・自分が他者に呑みこまれることによって、自分自身がなくなるという恐怖”と、“むしろ、自分の破片を放棄することによって、他者の自我にすっぽり入り込

んで”しまうことで対人関係の葛藤を放棄しようとする二つの方向性がある。

既述したように、対人関係において相互協調関係が重視され、他者との関係から自己が定義されがちな日本の文化社会的特徴の中において、このような「呑みこまれ」の二つの方向性が定まらず葛藤が起きる様相を、小此木（1978）は「山アラシ・ジレンマ」を用いて論じた。

小此木（同上）による「山アラシ・ジレンマ」は、“お互いの心理的距離が近くなればなるほど、傷つけ合いが深刻に起こってくるという、人と人との距離のとり方のジレンマ”であり、“相手の棘の否認や相手との合体によって解消しようとする躁鬱性格者”と“むしろ相手の棘を恐れるあまり、かたくなに相手との隔たりを守る形でジレンマを回避しようとする分裂性格者”の心理を理解する、精神分析の重要な鍵概念になる。さらに、このような概念は、“急激な社会変動の結果、個人と個人の心理的な距離を規制するルール（内的な規範、道徳、礼儀）は失われ、・・・対人的な距離感覚の失調状態にある”（小此木、同上）現代人の心理に反映できるとした。

このような不安、葛藤は現代人の心理として共通するとしても、それらが解決に向かうための「個」－「集団」の関係性、言い換えれば、対人関係の相互性のあり方にこそ、社会文化的特徴が反映されるのではないかと思われる。

「個」－「集団」の関係性に関連して、鑪（同上）はアイデンティティには「集団的自我」と「個人的自我」が含まれるとし、日本の場合、“大部分は、集団的自我に所属する方向で自己の自我境界を放棄して安定期に入る”ことが一般的であるとした。ただし、“日本における集団的自我は、その中心となるものが、西欧におけるような強烈な個性（自我境界の明確な個人、いわゆるカリスマ的パーソナリティー）を中核として形成されているのではなく、いわゆる、「権威の座」ないし、権威的人物像があって、それを中心に成り立っている”（鑪、同上）ことから、日本の「集団的自我」は流動的で曖昧な境界をもつものとなる。

実際、このような日本の特質は、自己理解および自己確立にもっとも関心が向く青年期の葛藤に反映されている。谷（2001）によると、“自己を他者から分化して捉えるか、あるいは他者との関連において捉えるかという対立的状況”に直面した際、日本の青年達には“現実の自分は「関係」の方に向いているが、理想としては「個」を志向しているという形の葛藤が多い”。

たとえば、近年、思春期青年期における「ひきこもり」が社会問題の一つとして取り上げられてきているが、その背景として、“これまでの日本社会は、周りの期待に応じて自己を抑制し我慢して頑張ることで、周囲に認められることが多かったため、どの年齢層に限らず日本人の約８割がこのイイコ特性を持っている”（宗像、2001）ことが指摘されている。この「イイコ特性」は、集団帰属感や集団からの評価が優先である一方、それと違和感をもっている「ありのままの自分」とのジレンマの中で、関係の拒否、集団化らの退きといった選択をせざるを得なかった一群であるのではないだろうか。

このように相互協調的自己観、すなわち、“「関係」の中での自己を準拠点とする”（谷、同上）日本においては、「個」を志向する場合はそれを他者・集団に気づかれる不安により対人関係から退こうとする反面、「集団」志向性を持ち合わせることによって自己喪失の懸念がもたらされるといったアンビバレントなジレンマが青年期の病理につながることが推測される。

Ⅲ．韓国のアイデンティティにおける特質

韓国の場合は、「アイデンティティ」の翻訳としてより頻繁に使われる「自我正体性」、それに必ずといっていいほど付随して書かれる「民族主体性」、「民族的自我正体性」という言葉が表すように、「個」－「集団」というふうに対置するのではなく、個人の中にすでに素因としてあるかのような集団性を各々が積極的に意味づけ、同一化することが青年期の固有の課題であると言える。

すなわち、“氏族社会に起因する血縁中心文化は血縁、地縁という社会組織原理を生み”（国際韓国学会、1998）、社会・経済的自立によって組織に所属し、その一員として自分を位置づけても、それは、“血縁や地縁、さらに学縁に比べ、盲目性や強制性が弱い”（国際韓国学会、同上）。

このような集団的自我の盲目性、強制性は、青年期の通過儀礼ともいえる徴兵制に象徴的に現れるといえる。「個」の葛藤や選択の全面的な否定が社会的に容認されるとともに、民族、国家、あるいは家族といった、「個」のもっとも基本的な基盤とも言える、集団を守るという大義名分のもと、否応なく「個」が崩壊される。このように集団性の絶対化のもと、集団と一体化した「個」として再構成される体験が、まさに徴兵によってもたらされていると思われる。

さらに、韓国の集団的自我において、他者との関係をつなげるのは、「情」である。儒教文化の影響により、韓国の社会・文化においてもっとも重要な倫理とされている「孝」は自己内集団としての家族主義を強め、“家族感情の延長線上で集団的自我における感情的結合を表わす情”（Choi&Choi, 1990）が集団への融合を支える重要な情緒となるのである。“情の共同体”（Choi, 1993）として集団が表現されるように、韓国において「個」－「個」、あるいは「個」－「集団」の連帯感は「情」という主観的かつ原初的な感情体験によって支えられていることから、自他の境界を無にし、集団に理没する際、個人において非常に積極的な自己動機を保証するものになると推測される。

このような個人と集団の運命共同体としての一体感の

強さや同じ起源・基盤をもつという連帯感をいかに獲得していくかという過程および課題こそが、韓国におけるアイデンティティ確立のテーマであり、それは逆説的に、没個人的自我境界（＝アイデンティティの否定）、あるいは集団的自我への理没を目指す過程であるともいえよう。

よって、韓国の集団的自我は、日本のそれとは相反し、原理的構造をもちながら、その境界は明確かつ強固である。それゆえ、他集団と根本的に相容れない性質をもつとともに、それに同一化する個人は集団がもつ性質や境界が、あたかも自分の世界そのものであるかのように捉えることによって、集団に埋没することが、個人が肥大化することにつながるといった矛盾する現象が生まれるのではないかと思われる。

このような家族や民族といった個人の根元的関係に基づいた集団性をもつ韓国のアイデンティティの特質は、韓国の青年のアイデンティティの形成において、「個」としての内的世界に目を向けることは自分の根元的関係を否定し、その集団への積極的帰属に対抗するものであるかのように捉えられやすいと思われる。

その代表的な例として、すでに言及した韓国の徴兵制は一時的な歴史や政治状況によって人為的に作られた制度であるにも関わらず、“民族を守るために、家族を守るために”といった抽象的な意味が加えられ、「大人」になるためには一度は経由しなければならない通過儀礼として一般的に捉えられている。この“大人になるために”というところの「大人」は、「個」を捨て、いかに積極的に集団への帰属を強化し、集団と同一化したところで得られる感覚を、いかにも自分の実感として受け止める過程を意味しているように思われる。

すなわち、軍隊体験を終えるとみんな親孝行になるといわれるほど、それまでの関係や生活から否応なく切り離された非現実的で厳しい規律の関係・生活体験によって家族・親との愛着関係が確められ、家族への帰属意識が強められるといった回帰的傾向が顕著に現れると同時に、強烈な集団の共同体験から、社会一般の価値観が、あたかも自分の実感であるかのように定型化されるという構造を描くことができる（図２）。

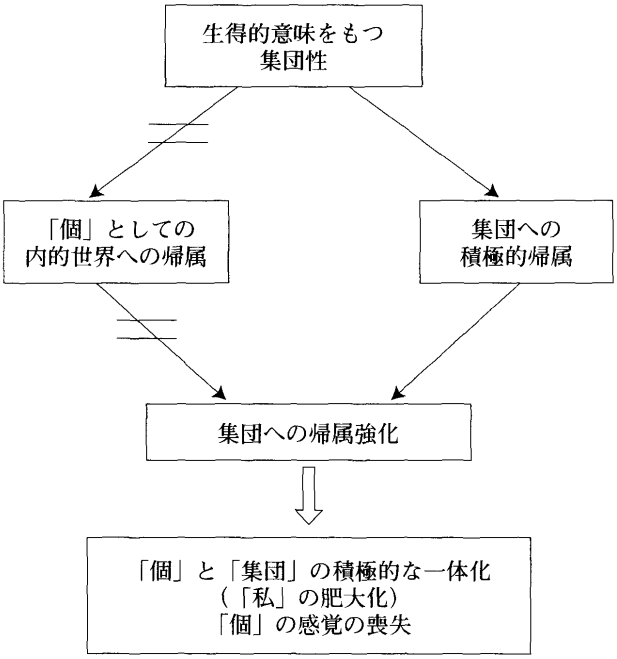

図２．韓国青年のアイデンティティ形成過程

このように集団との一体化によって肥大化し、定型化された「私」というのは強力な力を持つと同時に、その力以上に強力な「集団」という枠の中に「個」の感覚を失われたことに気付かなくなるのである。

1997年になって廃止された「同姓同本（姓が同じでその姓の発祥地も同一である）不婚制度」（民法第809条１号）を例に考えよう。儒教の家父長制の思想による、父系血族の純粋性を保つために頑固に守られてきたこの制度は、遙か遠い祖先が今、ここを生きる個人と一体化し、個人の一部として今に生きていると同時に、個人が結ぶ関係さえ支配しているといえよう。徴兵制が、それまでの「個」が強力な集団性の中に再構成、確立される一種の通過儀礼であるとすれば、儒教的背景から未だ女性に対して「男女有別」「女必従夫」「夫唱婦随」等の規範が求められる韓国社会において、このような男子青年のアイデンティティの再構築は、自ずと女子青年のアイデンティティ形成にも影響を及ぼすと考えられる。

Ⅳ．日本と韓国のアイデンティティ形成における「集団性」の違い

A．日本と韓国の比較：「われわれ」と「ウリ」

上述したように、個人のアイデンティティ形成において、集団あるいは集団の関係は切り離して考えることはできない。日本の特質としては、アイデンティティの形成において、「個」－「集団」の葛藤を乗り越え、集団の中に「個」を埋没させていくかという方向性をもつとした。

しかし、韓国の場合は、そもそも集団、しかも、家族や民族といった絶対価値をもつようにみえる性質をもつ

表１．韓国人と日本人の We-consciousness の比較

	われわれ（日本）	ウリ（韓国）
関係性	価値観の一致 互恵性 興味や関心の類似	秘密を持たない 隔たりがない 喜怒哀楽の共有
意味合い	同質性 共通性 所属感	親密感 近さ 信頼 心地よさ
基盤	（組織－活動中心） 共同目標 共同活動	（家族意識） 感情的連帯感 共同運命性

（Sang-Jin, Choi；1993）

集団との一体化が前提となり、その事実をいかに個人が積極的に意味づけるかという、非常に積極的な意味での集団的自我の形成が特質として挙げられる。

鑪（同上）は、日本の集団的自我の形成が“没個人的自我境界（つまり、アイデンティティの否定）”であるとしたが、同じく没個人的自我境界に向かうと思われる韓国と比べると、その内容と質はずいぶん違ってくるのではないかと思われる。

鑪（同上）によると、日本の場合は、集団的自我の中心となるものが“「権威の座」ないし、権威的人物像であって・・・座にいる個人の個性、パーソナリティーが集団形成力ではない”ため、“(その）イメージを揺るがすような脅威が外から与えられると、もともと、個人の個性や自我境界は脆く、弱いのだから、簡単に分解されてしまうことが多い”としている。しかし、韓国の集団的自我の中心となるものは、家族や民族あるいは血縁や地縁といった「個」がそもそも成立しない、絶対性をもつ集団である。したがって、没個人的自我境界は方向性ではなく、そもそも前提となっているといえよう。

このような日本、韓国の集団性の違いを、Choi(1993)は、日本で集団に含まれる個を指した場合の「われわれ」の概念と、同様に「われわれ」に対応する韓国の「ウリ」の概念を比較することによって明らかにした（表１）。

Choi の日本と韓国における「We-consciousness（われわれ；ウリ)」の比較によると、韓国の‘ウリ’という言葉の中には家族関係が、その性格そのままに家族外の関係に拡大された意識および経験体系が表れ、日本の‘われわれ’の中には、共同目標や共同活動を基本的属性とする集団共同意識と経験が特徴的に表れた。

すなわち、韓国の場合、韓国の家族のあり方でみられる‘自他未分化’の心理的連帯感が集団においても強く反映されているのに比べ、日本の場合は、“遠慮がない身内は文字通り内であるが、それ以外の遠慮のある義理の関係は外である”（土居、同上）ように、社会的連帯感と心理的融合が区別され、それに伴う情緒的反応も異なってくる。

このように個人的属性の延長線で集団と連帯し、運命共同体として関係を捉える韓国の場合、集団的自我への同一化は自他の境界、内－外の区別の見分けがつかない、「個」＝「集団」といった一体感自体が求められ、いかに積極的にその一体感を受け入れるかが重要であるといえよう。言い換えれば、「私の世界」「あの人の世界」「皆の世界」（梶田、同上）の境界がなく、混同・未分化された状態あるいは関係がよしとされるのである。

しかし、その集団的自我は、家族主義という個人的属性が基盤になっていることから、血縁や地縁などの独自性の強いものに頼っており、逆に、他集団との融合や受け入れは難しい。韓国では、先輩・後輩関係、友人関係が“兄・姉”“弟・妹”といった呼び名で通用するように、他者との関係をも血縁的関係の拡大として捉えながらも、それゆえに、一体化されない異質なものとはまったく断絶してしまうパラドクスが起きる。

反面、日本の場合は、集団がそもそも目的性をもち、それを達成する役割としての個の位置づけとして集団的自我の形成が進められることから、集団の中での内と外の区別、個と集団の境界が残され、だからこそ、「個」－「集団」の距離や調和が重要な課題になると同時に、異質なものともつながる柔軟性が残されるように思える。

このように、日本と韓国の「集団性」およびそれに基づいた集団的自我形成のあり方は、両者の社会・文化的背景とともに、その方向性と性質が異なることが明らかである（表２）。

表２．日本と韓国の集団性の相違

	日本の「集団性」	韓国の「集団性」
自己意識	「個」－「集団」の葛藤または融合	「個」＝「集団」
集団意識	同類意識	同族意識
対他者・他集団	取り入れ・融合	独自性の固執
関係性	組織の垂直関係	血縁の水平関係
他者境界	私・あの人・皆の分化	私・あの人・皆の未分化

B．西欧との対置からみる日本と韓国の相違

このような日本と韓国の集団性の相違を踏まえて、従来それぞれが比較されてきた西欧との対置を通して、改めて、両者の特徴を図１にまとめた。

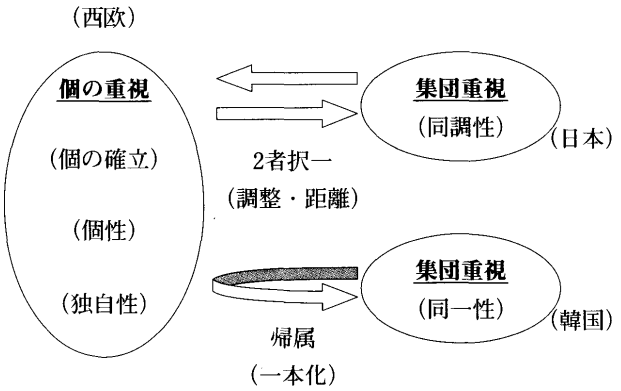

図１．西欧との対置からみる日本・韓国の集団性の相違

既述した内容を概観すると、“強烈な個性（自我境界の明確な個人、いわゆるカリスマ的パーソナリティー)”の確立、あるいはそれを中心とした集団的自我の形成を求める西欧とは対置するところで、日本と韓国の両者とも「個」の再構成による集団的自我に向かいながらも、日本は“「権威の座」ないし、権威的人物像があって、それを中心に（集団的自我が）成り立っている”反面、韓国は血縁や地縁を基盤にした個人的属性が「個＝集団」の図式を成立させている。

したがって、自他の境界を明確にし、個人の独自性や創造性を求める西欧の自我同一性のあり方を、「個」を理解する一つのモデルとして相対化したときに、日本の場合は、“集団への一体化と回避”（谷、1997）といった二つの相反する方向性の間で葛藤が起きてくる。それは、そもそも集団帰属意識をもとにした、相互協調関係の維持を重視が生む集団への同調性が働いているからであると理解できる。韓国の場合は、相互協調関係といえども、その相互性は一体性を基盤にしたものであることから、個人がもつ性質は全て集団に帰属させ、一体化する構図が生まれると思われる。

V．まとめ

以上、日本と韓国の「集団性」の違いおよびそれに関連したアイデンティティ形成における特質の相違について論じた。日本と韓国の両者とも、“「関係」の中での自分を準拠点とする”ところでは、確かに、「集団性」を基盤とした自己の確立の課題が共通しているといえよう。

しかし、「関係」の性質が異なり、したがって、「集団性」のあり方も異なってくることがうかがえる。韓国の家族や民族といった根元的基盤をもつ関係性においては、相互協調関係を重視しながらも、他者に呑みこまれることへの恐れを同時にもつ日本特有の葛藤はみられないであろう。そのような葛藤をもたない集団と一体化した関係は、個人に揺るがない基盤と確固たる自己の実感をもたらすかのように見えるかも知れない。一方、韓国の視点から見ると、日本における心理的距離とその調整に伴う葛藤をもつ２者択一の世界は、逆説的に、「個」のあり方の多様性が許され、主体的な選択によって関係性を定立していくことの可能性を示唆しているように見えるのではないかと思われる。

筆者は、このような両者の違いが否定的かつ表面的な次元で扱われる場合、一般的に韓国人が日本人との関係において感じる、排他性、距離感に影響し、日本人が韓国人との関係において感じる、感情的で衝動的であり、距離をもたない侵入感といった受け取り方につながっているのではないかと推測している。

このような対比によって、従来、西欧との対比で吟味できなかった日本の「集団性」に対する新たな視点を見出すと同時に、課題と可能性をみることができたのではないかと思われる。補足になるが、本稿の視点に沿う韓国のアイデンティティ形成の問題については、日本のそれに比べ、十分な資料が得られなかった。それは筆者の今後の課題でもあるが、実際、日本で注目されているような「個」の確立や自立を課題にした視点自体が乏しいことも一因であると思われる。このような関心のあり方自体が日本と韓国の相違を表わしているのかもしれない。

アイデンティティの確立という視点から日本と韓国の類似性と異質性を比較検討するといったアプローチは、それぞれの独自性や固有さがより明らかになることに加え、相互理解のための有意義な示唆を得るために、今後さらに検討される必要があると思われる。それは、現在に至るまで様々な意味で密接な関係をもち、さらに今後もその関係を切り離せない両者が、互いに拠って立つ基盤を受容し、独自性を尊重する手がかりが得られると思われるからである。さらに、相手を通して新たな自己発見をすることによって、自己成長につながるといった、真に互いに必要とする関係へ展開する可能性を実感しているからである。

＊本稿は日本心理臨床学会主催「日韓国際交流シンポジウム」（2002年７月）での発表要旨を加筆・修正したものである。

参考文献

E.H. エリクソン　1950　Childhood and Society. W.W.Norton.（仁科弥生訳　1977　『幼児期と社会Ⅰ・Ⅱ』　みすず書房）
E.H. エリクソン　1973　アイデンティティ　岩瀬庸理訳　金沢文庫
西平　直　1993　エリクソンの人間学　東京大学出版会　p241－265
森省二　1989　正常と異常のはざま　講談社現代新書　講談社
清水将之　1983　青い鳥症候群；偏差値エリートの末路　弘文堂
梶田叡一　1998　意識としての自己－自己意識研究序説　金子書房　p117，p141－154
南　博　日本的自我　岩波書店、1983
北山忍、1995　文化的自己観と心理的プロセス　社会心理学研究　10　p670－685
三好智子　2001　“個”－“集団”間葛藤の観点からみた青年期後期の自我同一性の形成過程　心理学研究、Vol.72，No.4，298－306
高田利武・丹野義彦・渡辺孝憲　1987　自己形成の心理学　川島書店
谷　冬彦　1997　青年期における自我同一性と対人恐怖的心性　教育心理学　45　p264－262
鑪幹八郎　2002　アイデンティティとライフサイクル論　ナカニシヤ出版　p63，p342－348
小此木啓吾　1978　モラトリアム人間の時代　中央公論社　p94、p155－159
国際韓国学会編　1998　韓国文化と韓国人　（株）四季節出版社
Choi, Sangjin & Choi, Suhyang　1990　情の心理的構造　韓国心理学会年次大会　学術発表論文抄録　１－９
Choi, Sang-Jin　1993　韓国人と日本人の‘ウリ’意識比較　韓国心理学会年次大会　学術発表論文抄録　229－244
Choi, Sangjin　1993　韓国人の心情心理学；情と恨（ハン）に対する現象学的一考察　韓国心理学会年次大会シンポジウム　５－21
土居建郎　1971「甘え」の構造　弘文堂　p38